

ミュージック・コンクレートの着想 一九四八年

武満徹は一九五九年十月に発表した「ぼくの方法」という文章において「ぼくは、一九四八年のある日、混雑した地下鉄の狭い車内で、調律された楽音のなかに騒音をもちこむことを着想した」と述べている。そして、この文章は「一九四八年に、フランスのピエール・シェフェールという人が、僕と同じような着想で、ミュージック・コンクレート (musique concrète) の方法を発明した。僕は、この偶然の一致をよこんだ。音楽は、新しく変わりつつある」と続いている。武満のこの発言から、後に『ミュージック・コンクレート』の方法(略)は、フランスのピエール・シェフェールによるもので、彼は武満と同じ年にこの方法を思いついたのであった」と判断され、あるいは「武満は、現実音の『音の河』から自分の音楽をつかみ出すという着想を持っていたのである。武満がその着想を得たのは、奇しくも、ピエール・シェフェールが、ミュージック・コンクレート

はおそいですね。ぼくはそういうことを絵の段階としてやっている。音楽でもそれをやったらどうかと考えてたんだ」と述べており、戦前のパリで岡本は「調律された楽音のなかに騒音をもちこむ」ことを空想していたことが分かる。

一九四六年十月七日に清瀬保二や早坂文雄らによって結成されていた「新作曲派協会」という作曲家グループへ、武満は五〇年十月に入会した。そして、武満は一九五〇年十二月七日に読売ホールにて開催された「新作曲派協会 第七回作品発表会」において、ピアノ曲「二つのレント」を発表したことにより実質的な作曲家としてのデビューを飾る。しかし、讀賣新聞の評では「武満徹のレントを二つ並べただけではシルコ¹⁰の次にゼンザイを食った感じで形式観に乏しい。天才は感じたまゝが形式をなし得るが逆の場合は形式の論理を無視出来まい。」と書かれ、東京新聞の評では一言「武満徹の二つのレントは音楽以前である」と切り捨てられ、そして「音楽藝術」誌の一九五一年二月号での原太郎による評でも「終始はげしい不協和音をひびかせて飽きさせず、この處理が少しも唐突でないことは凡庸ならぬものを思わせる。しかしこの感覺(そもそもレントが二つおしならんではない)は今日のものではない。日本のものとしては過去のものでもない。こういう普遍性のない、別の言葉でいえば社会性のない仕事だ、『藝術』であり得るのは音楽の世界だけだということに思いをいたされたい。そのこと

を着想したのと同じ、一九四八年だった⁴」などと見なされている。すなわち、フランスにてシェフェールがミュージック・コンクレートという技法を創始したのと同じ年に、武満は日本で同種の技法を着想したものと受け止められているわけである。

ただ、日本におけるこうした着想は武満がパイオニアであったというわけではない。例えばパリで一九三〇年から四〇年までを過ごした岡本太郎は、一九五四年十一月に発表された対談において「ところで純粹に感覺的¹¹というか、心理に訴えてくる官能的な音と、むしろ生活的に迫ってくる、鉄砲の音とか、車の音とか、いわゆる雑音的な、そういう対極的なもの。觀念的なものと、粗野な雑音とを、混じえるというよりも、むしろそういうものを鋭く創造して行くという方法はないかね。(略) ぼくは音楽の方はズブの素人だけれども、街の騒音とか、その他いろんな非音楽的な音ね、それをレコーディングしてオーケストラなんかに入れたらどうかというふうに、いまから二十年くらい前から思っていたけれどもね。(略) ずいぶん音楽の方

はさらにつきつめるならば、本當はこれではそもそも藝術的境界であり得ないのだ、ということだ」と酷評を受けた。しかし、秋山邦晴は「特に二曲目のレントは、はじめて聞くような新鮮な響きでした。湯浅と隣り同士で聞いていて、これはすごいじゃないかといって、終つてすぐ楽屋に飛んでいった」ことから、武満は秋山と湯浅譲二に出会い、これを契機として武満と湯浅らの交流はスタートすることとなる。

後年、ラジオ番組において秋山は「武満徹という作曲家は、初めからいろんな音響の独特な追求をしたと思うんですよ。で、僕が初めて会った頃って、まだ彼が十九か二十歳の頃で(註・武満が二十歳の誕生日を迎えたのは二ヶ月後、僕が一つ上なんですけれども、ある時、一九四〇年代の終わりか五〇年代の初めに地下鉄の中でね、僕はね、楽器でいろんなオーケストラ曲を書くとか、そういうことよりも、今は一番やりたいのは扉が、ドアがグーツと軋つた音だとか、地下鉄のゴーって言うような音だとか、そういう現実の音をモニタージュして作るような音楽。それで一番、僕のいま作曲したい世界が出るんだけどなって言ったことがあるのね。」と発言している。武満も別の機会に「そのとき、秋山(邦晴)をつかまえて、こういうことをやりたいと、すごく熱くしゃべったことは覚えてるんです」と発言しており、これらの発言からも一九四〇年代末から五〇年代初頭にかけて、武満がミュージック・コンクレートの作曲の着想をしていたことを裏付けることができる。